|  |  |
| --- | --- |
|  | No.43　　2011．8．6銀山中学校神　　貴　夫 |

2011年　ヒロシマ平和宣言

はじめて国の原子力政策見直しに言及！

～「黒い雨」「フクシマ」「核と人類は共存できない！」～

　今年ほど広島の原爆死没者慰霊式・平和祈念式が注目された時代がかつてあっただろうか。北海道新も大きく紙面を割いて関連情報を伝えていた。いうまでもなく東日本大震災、福島第1原子力発電所爆発事故、放射性物質の拡散という未曾有の災害を受けて、人類初の原爆投下都市であるヒロシマがどんなメッセージを発信するか、国内のみならず世界が注目した。松井市長は宣言文の中で、原子力政策にふれ「核と人類との共存はできない」「早急にエネルギー政策を見直し・・・」と一定の見解を初めて述べた。しかし、私の個人的な見解では、前進ではあるが極めて不十分だと言わざるをえないと感じている。もやもやとしたフラストレーションが渦巻いている。

「・・・・訴える人々がいます。」という表現は被ばく都市の当事者としての直接的な見解を避け、自らを中立的な立場、安全圏の立場においた政治的表現だ。当事者の利害関係から逃げる第三者的な目線であると言わざるを得ない。原爆症認定裁判で内部被ばくに苦しみながら切り捨てられ続けた被爆者の立場を代弁する最も重要な機会であったはずだ。これからフクシマを初め広範囲な地域の人々、とりわけ次世代を担うべき子どもたちが同じ苦しみを背負う可能性を抱え込んでしまったことを考えれば、「核と人類との共存はできない」立場から脱原発を明確に主張すべきだった。被爆都市ヒロシマの内実は、侵略戦争を支えた軍事都市・工業都市であり、今もその基本構造は変わらない。広島神社に行けば大企業の献金の証を多く見ることができる。靖国へとつながる精神的支柱に集まる構造が連綿と今も続いている。原子力政策を続けてきた者たちがそこに存在し続けている。この壁を破ることはできなかったということか・・・・。しかし、足がかりはできたと前向きに考えたい。過酷な現実はこれからはじまるのだから。

2011　平和宣言

66年前、あの時を迎えるまで、戦時中とはいえ、広島の市民はいつも通りに生活していました。かつて市内有数の繁華街であった、ここ平和記念公園の地にも、多くの家族が幸せに暮らす姿がありました。当時13歳だった男性は、打ち明けます。――「8月5日は、中学2年生の私にとっては久しぶりに一日ゆっくり休める日曜日でした。仲良しだった同級生を誘って、近くの川で時間の経つのも忘れて夕方まで、砂場でたわむれ、泳いだのですが、真夏の暑いその日が彼との出会いの最後だったのです。」ところが、翌日の8月6日午前8時15分に、一発の原子爆弾でそれまでの生活が根底から破壊されてしまいます。当時16歳だった女性の言葉です。――「体重40キロの私の体は、爆風に7メートル吹き飛ばされ意識を失った。意識が戻ったとき、辺りは真っ暗で、音の無い、静かな世界に、私一人、この世に取り残されたように思った。私は、腰のところにボロ布をまとっているだけの裸体で、左腕の皮膚が5センチ間隔で破れクルクルッと巻いていた。右腕は白っぽくなっていた。顔に手をやると、右頬はガサガサしていて、左頬はねっとりしていた。」

原爆により街と暮らしが破壊し尽くされた中で、人々は、とまどい、傷つきながらもお互いに助け合おうとしました。――「突然、『助けて！』『おかあちゃん助けて！』泣き叫ぶたくさんの声が聞こえてきた。私は近くから聞こえる声に『助けてあげる』と呼びかけ、その方へ歩み寄ろうとしたが、体が重く、何とか動いて一人の幼い子供を助けた。両手の皮膚が無い私は、もう助けることはできない。…『ごめんなさい』…。」

～　中略　～

その被爆者は、平均年齢77歳を超えながらも、今もって、街を蘇生させた力を振り絞り、核兵器廃絶と世界恒久平和を希求し続けています。このままで良いのでしょうか。決してそうではありません。今こそ私たちが、すべての被爆者からその体験や平和への思いをしっかり学び、次世代に、そして世界に伝えていかなければなりません。

～　中略　～

また、**東京電力福島第一原子力発電所の事故も起こり、今なお続いている放射線の脅威は、被災者をはじめ多くの人々を不安に陥れ、原子力発電に対する国民の信頼を根底から崩してしまいました。そして、「核と人類は共存できない」との思いから脱原発を主張する人々、あるいは、原子力管理の一層の厳格化とともに、再生可能エネルギーの活用を訴える人々がいます。日本政府は、このような現状を真摯に受け止め、国民の理解と信頼を得られるよう早急にエネルギー政策を見直し、具体的な対応策を講じていくべきです。また、被爆者の高齢化は年々進んでいます。日本政府には、「黒い雨降雨地域」を早期に拡大するとともに、国の内外を問わず、きめ細かく温かい援護策を充実するよう強く求めます。**

私たちは、原爆犠牲者の御霊に心から哀悼の誠を捧げるとともに、「原爆は二度とごめんだ」、「こんな思いをほかの誰にもさせてはならない」という思いを新たにし、核兵器廃絶と世界恒久平和の実現に全力を尽くすことを、ここに誓います。

　平成23年（2011年）8月6日

広島市長　松　井　一　實

長崎平和宣言　「脱原発」は盛らず！

～　重要な政治決断から逃げた田上市長の哀れ　～

やはりこの男は逃げた・・・・・。事前のニュースで「長崎原爆の日」（８月９日）の平和祈念式典の平和宣言文を論議する様子を見た。宣言文は複数名の委員の意見を元に最終的に市長が決定する手続きになっていた。フクシマの放射能汚染と被曝をナガサキの被爆に重ね、「脱原発」に踏み込む内容にすべきという委員の様子が出ていた。片や、「原爆と原発はちがう問題であり平和宣言にはなじまない」とする委員(女性)がいた。市長は自らの見解は述べず、総合的に判断するとしたところで番組は終わった。この時から私の中では「この市長は踏み込めないだろう」という予感があった。そもそも彼が市長選に出馬した経過から信じきれないものを感じていた。

2007年4月17日に伊藤一長長崎市長が銃撃され亡くなった事件の際に出馬し、超短期間の弔い選挙という異常な状況の中で当選した人物である。この選挙では期日前投票や不在者投票での「伊藤一長」票がすべて無効票となるなどの問題が噴出し、公職選挙法上の問題として取り上げられる経緯をたどっている。狡猾さを感じたのは私だけではないだろう。彼は政治屋ではあっても、哲学を持った政治家ではないのだ。

～何はともあれ最新のニュースより～

長崎平和宣言　田上市長　「脱原発」は盛らず

長崎市の田上富久市長は２８日、「長崎原爆の日」（８月９日）の平和祈念式典で読み上げる平和宣言の骨子を発表した。福島第１原発事故を受け、焦点となった原発問題について「脱原発」の文言は盛り込まず、将来的に安全な社会に転換するために原子力に代わる再生可能なエネルギー開発の必要性を訴える。また、東日本大震災の犠牲者への哀悼の意と、被災地に向けた復興へのメッセージを表明する。

　会見で田上市長は「再びヒバクシャをつくらないのが私の思い」と説明。宣言文を練る起草委員会では「脱原発」に踏み込むよう求めた委員も少なくなかったが、**田上市長は「原発は一市長がどうこうというのではなく、世界的なテーマ。**『脱原発』にとらわれることなく、原発に依存してきた社会からより安全な方向へ変えるのが私の考え。産業や市民生活など社会を壊さないようにすることが重要で、**急ぐと混乱を招く**」と慎重姿勢を貫いた。

　式典には露、英、仏の核保有国を含む過去最多の４９カ国が参列予定。平和宣言では、各国に核兵器禁止条約の締結を、日本政府に非核三原則の法制化を求める。【下原知広、釣田祐喜】

　「原発は一市長がどうこうというのではなく、世界的なテーマ」「産業や市民生活など社会を壊さないようにすることが重要で、急ぐと混乱を招く」・・・・何が言いたいのかさっぱりわからない。腰砕けの政治屋が語る言葉とはこれほど魅力のないものかとつくづく思う。「再びヒバクシャをつくらないのが私の思い」と自らの述べながら、今まさに被曝者が大量に出てしまった深刻な現実から逃避し、自己保身の重心を探っている。彼の言うヒバクシャとは「被爆者」であって「被曝者」ではないのだ。広島市長が脱原発に具体的に踏み込まなかった状況をすかさず察知し、保身のマントを纏った政治屋能力は高い。しかし、政治とはそうしたものではないはずだ。

　かつて、天皇の責任に言及し右翼の銃弾に倒れた本島 等(元長崎市長)と一度、縁があって酒の席で話をする機会があった。本島氏はとりわけ日本の戦争責任に対して明確な主張を持っており、自らの従軍経験からくる哲学はゆるぎのないものだった。原爆投下に対する発言でも、「（満洲事変から）15年間にわたるあまりに非人間的な行為の大きさを知るに従い、原爆が日本に対する報復としては仕方がなかったと考えるようになった」と発言するなど大きな世論を起こしたことでも知られる。彼は、ことさら被害ばかりを強調する戦争観が再びかつてのナショナリズムに収斂されつつある風潮に釘を刺したのだ。当然の結果として右翼勢力から弾圧を受けることになる。また、被爆者団体からも批判を受けた。

銃撃事件についてウキィペディアでは次のように紹介されている。

「1990年1月18日、警備費用がかかりすぎるとの自民党市議の批判を受けて警察が警備を緩和したときに、右翼団体『正気塾』の田尻和美が本島を背後から銃撃した[1]が、奇跡的に命を取り留めた（長崎市長銃撃事件も参照）。その後、本島は瀕死の重体であったが「犯人を赦す」と述べている。」

　賛否は色々あるだろう。私も異論はある。しかし、政治を司る者は自らの政治信条を明らかにし、行動すべきなのだ。本島市長の生き様はまさに「政治家」と呼ぶにふさわしいものだったと思う。悪性新生物質(ガン)の異常な上昇が核兵器や原子力から出る放射性物質と深くかかわっている事実を知れば、本島氏も日本の戦争責任と同じ延長線上で原子力の問題を捕えたはずだ。原子力は「命」をむさぼり自ら超え太る、命の自爆装置に他ならない。「非人間的な放射能被害の大きさを知るに従い、原子力停止によって日本が一時的に経済的苦境に立ったとしても仕方がない。」・・・・本島氏であれば批判を恐れずにこう述べたに違いない。